〈右隻〉

7　川端龍子　南山三白

昭和四年（一九二九）　絹本着色
本紙各二〇〇・二×四三二・〇

六曲一双

昭和三年、岩崎家は昭和の大礼を奉祝するため屏風五双の献上を計画し、川端龍子（一八八五～一九六六）を含む五名の画家に制作を依頼した。それを受けて川端は、早速翌年には本図を完成させている。昭和三年というと川端が日本美術院を脱退した年であり、その翌年には本図の完成、発表とほぼ時を同じくして、川端は青龍社の設立を宣言し、その秋には第一回青龍展を開催している。そうした画家本人にとって大きな転換期の、世間からも大いに注目を集めていた最中に、本図は発表されたのである。美術団体を立ち上げる直前の活力に満ちた作者が、献上画ということでさらに気合いを入れて筆をふるった作品である。

六曲一双の画面を見ると、左隻の画面左下に根を下ろした柏の樹はその葉を旺盛に繁茂させ、うねりながら右隻にまで枝を伸ばす。その柏のうねりと呼応するように、振り向いて首をのばすのは雄の白鹿である。かたわらにはその伴侶たる牝鹿も気高い雰囲気をまとって右方向を見つめている。彼らが腰を下ろす地面には熊笹が生い茂り、その中から白百合が気品に満ちた姿を見せている。右隻に目を移すと、柏の枝先と地面にやはりつがいの白雉子が描かれている。この白鹿、白百合、白雉子が題名にある三白であるが、古来より三つの白いものを取り合わせた三白図は慶賀の意味を持つ画題として好まれ、白鷹、白雁、白雪を組み合わせた例などがある。また南山とは中国の終南山を指す。この終南山のように不変であれの意味で「南山之寿」という長寿を願う言葉あるように、吉祥の意味合いが込められた画題である。立ちこめる金雲の中で、そうした吉祥性のあるモチーフが作者特有の非常に力強い躍動感をもって描かれている。

〈左隻〉

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

花ひらく個性、作家の時代―大正・昭和初期の美術工芸
三の丸尚蔵館展覧会図録No.50

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十二年三月三十日発行

© 2010, The Museum of the Imperial Collections